転換期にある日本のロゴセラピー（日本語訳）

日本におけるロゴセラピーについて語る場合、差し当たり、ロゴセラピーは日本と何の関係があるのか？という問いが起こる。この問いは迫る、なぜならロゴセラピーはユダヤ・キリスト教的文化圏において成立したのであり、それに対して日本人は神道、仏教、儒教、道教などの精神的風土の中で　―　しかり、まさに東洋的精神的世界の中で生きているからである。

ヴィクトール・Ｅ・フランクルの著書は 1960 年代の前半に日本語に翻訳され、そして広められた。2005 年の春以来、東京から北方の地に最初の（！）日本の研究所が存在する。この論考の著者はこの研究所を開設者かつ所長、心理学者であり心理療法家である吉田香里女史をインタビューのために訪ねた。

仙台ロゴセラピー研究所はその成立を勝田茅生女史 M.A.に負っている。彼女はバイエンルン州のエッヒングに住むが、西南ドイツ・ロゴセラピー研究所においてエリザベト・ルーカスのもとでロゴセラピー教育研修を終了し、2001 年 4 月以降、東京と大阪と仙台で入門ゼミナールを指導している。吉田女史は 2005 年 1 月、勝田茅生のもとでロゴセラピー研修教育を終了した。その後、4 月、それまで仙台市役所で公務員として保健衛生専門家だった吉田女史は仙台ロゴセラピー研究所を開設した。吉田女史はすでに彼女の活動からニ、三のことを報告することができる。彼女は「ジェームズ・Ｃ・クラムボーのＰＩＬテスト」に関する講習を支持し、病院看護師たちのために一連の『医者による精神の教導』という主題にかんする講演を行った。その他、研究所は家庭と学校における暴力、「うつ」そして取り分け自殺というテーマに関しても市民のために教育的な仕事を行っている。その際、『それにもかかわらず人生に然りという　―　心理学者、強制収容所を体験する』というフランクルの講読テキストとかかわっている。吉田女史は議論のためのサークルに関心のある人々を招いている。彼女はこのサークルにおいてハドン・クリングバーグ・Jr.の『人生が私たちへ呼びかけるとき』という本を使っている。吉田女史は彼女の聴取者のために「意味への意思」「精神の自由」「責任」というような諸概念を一般に理解し易い言語に訳している。彼女は芸術家や音楽家たちもサポートしている。また「うつ」治療の成功事例も報告できる。２００５年わがロゴセラピストは自己のため高次の脳機能障害で悩む人々のために認知心理学的グループ・リハビリ・プログラムを遂行した。このプログラムはわがロゴセラピストにとって大きな成功だった。委託者は国の助成を受けた病院だった。このプログラムにおいて吉田女史にとっては、人間の精神は高次の脳機能が部分的に損なわれたときも健全なままにとどまるというヴィクトール・E・フランクルのテーゼの正しさを確認することが問題だった。このプログラムのためにわがロゴセラピストはクラムボーのＰＩＬテストを適用し、フランクルのテーゼを支持し得ると思われる洞察を得た。いま吉田女史は、もちろん結果を確証できると希望しながら、彼女の理論を検証する比較グループを組織したいと思っている。彼女は第二のテストを残念ながら実現できなかった。なぜ

ならプログラムの委託者は更なるプログラムを支持しなかったからである。そのようなプログラムはしかし吉田女史によると、ただ病院によってだけ遂行され得るだろう。吉田女史はその場合、たとえば身体障害者のための国立リハビリセンターがふさわしいと考えている。

仙台ロゴセラピー研究所の仕事を十分に理解可能にするためにこの報告の著者は、すでに日本実存療法学会があることに言及しなければならない。http://nagata.tv/logos.html この学会は主として医師からなる。それは1993年、日本実存身心療法研究会から生まれた。この研究会の開設にヴィクトール・E・フランクル自身、彼の東京医科大学で行った講演をもって貢献した。この歴史的な関連は日本実存療法学会が最初からその重点を、医学とのかかわりで使用される限りでのロゴセラピーの上に置くことを暗示している。すべて他の生活領域のためのロゴセラピーはそこではあまりにも不充分にしか取り扱われていない。このことは日本実存療法学会の内部においても批判された。この学会の活動はもっと多く取り分け一層広い生活領域をカバーするべきであるという要求が声高に言われるようになった。例えば、この学会の機関誌『全人的医療』第4巻、１号（2001年）の編集者のあとがきの中に次のようにいわれている。「われわれは教条主義に陥ってはならない。われわれはもっと自由に精神医学と心理療法の他の、諸々の学派と対決すべきだろう。われわれの学会は自分の事柄に囚われるようであってはならないだろう。むしろそれは日本の社会にその扉を開くべきだろう。それは教育、宗教、経済といった生活分野のなかで働く人々と交換すべきだろう。ヴィクトール・E・フランクルが模範的に生きた「実存的生」をわれわれの社会の人間に知らせ、そしてそれをさらに展開させることは重要である。」

これは日本実存療法学会の厳かな表明である。残念ながらこの表明は今日まで実現されていない。今日までいかなる転回もなかった。他の心理療法と精神医学の学派との対決は以前と同様今も欠けている。「教育」「宗教」そして「経済」の諸領域を代表する人々との対話はほとんど出来事とならなかった。

ロゴセラピーは日本とどうかかわりがあるのかという始めの問いへ戻ろう。日本の内部および外部における人々の生活状態は非常に変化した。教育基本法の重要な部分は変えられた。日本人がその意義を学び知ろうと思った「人格」の原理は忘却に陥った。「日本文化」の伝統は強調される。宗教あるいは宗教的情操と愛国心はほとんど同義語として使われている。生活システムはますます強く危機にさらされている。貧富の間の格差はますます大きくなり、差異は固定される。イジメ、すなわち他者の差別と軽蔑的な扱いは広がる。人間は自分の中にひきこもる。社会的な同一性の喪失は増大し、失業、「うつ」、薬物依存、自殺、殺人、家族崩壊、社会の高齢化は進む。借金は増え、戦争は終わりを知らず、自衛隊は強化される。普通の、「健康な」日常は遙か遠く退く。現実はもはや把握できなくなり、もはや支配できない。何が一体起こっているのか？時代精神を調べなければならない。集団ノイローゼは優勢になり、実存分析の助けを借りて克服しなければならない。吉田女史と他のロゴセラピー訓練コースの卒業生たち、そして共通の教師である勝田女史はいま

2008 年 1 月に会議を組織することを計画している。会議の目標は社会という有機体を全体的に分析しその回復への道を展開する研究会を設立することである。勿論、新しい研究会はロゴセラピストの相互支援に奉仕するものと考えられる。

さてロゴセラピーの将来の展望に関していえば、その日本における認識度は、吉田女史に従うと、高くない。わがロゴセラピストは臨床心理士として仕事の委託を得るのであって、ロゴセラピストとしてではない。吉田女史はできるだけロゴセラピーを道具として仕事をするが、それは彼女に委託を与える者にとっては重要でない。この国のいかなる大学も、吉田女史に従うと、心理療法家教育のための、ロゴセラピーに方向づけられた教員を所有していない。それゆえロゴセラピーが、吉田女子も属する臨床心理療法学会の大会で話題のテーマになることは稀である。彼女は例えば 2006 年この学会の大会で、彼女のすでに言及された研究成果を発表した。それは「高次脳機能障害者のためのグループ・リハビリテーション・プログラム　―　生の意味と生の目標についての意識の変化とのかかわりで」と題されるものだった。およそ 500 人にのぼる講演者のうち吉田女史はロゴセラピーについて報告した唯一の話し手だった。吉田女史は言及された学会の大会でロゴセラピーについて報告することを止めない。

最期に、吉田女史がいまロゴセラピーの日本化の可能性を探求することに注意を促したい。森田療法と内観療法は日本の精神的伝統に由来する療法形態である。この間に、それらの療法はヨーロッパにおいてもアメリカにおいても知られるようになった。吉田女史は動作（身体運動）療法も加える。この療法においては、身体運動を心的健康の回復のために使う療法形態が問題となっている。実際、「身心は 1 つに結びつく」あるいは「身体、心そして呼吸を調和させる！」というような諸原理を持つ東洋的精神的伝統は存在する。*誰が*一体この 3 元を統一および調和へと齎すのか？吉田女史はまさにフランクルのいう意味での「精神的人格」がそれを為すという。この報告の著者は確かに吉田女史の意味で次のことを付加できると考える。それはすなわち、フランクル自身言ったということである、「ロゴセラピーに関していうと、それは万能薬ではない。それは従って心理療法への他の接近方法と協力することに開かれている」と。ロゴセラピーの自己主張は必ずしも、土着の諸療法形態に対する開けに矛盾しなければならないのではない。

どのように土着の心理療法形態の代表者たちはロゴセラピーの独自性を評価するだろうか？人はこれを安心して地元の療法家たち自身に委ねることができる。仙台ロゴセラピー研究所はいずれにしても、ロゴセラピーが日本的土壌の上で日本のものになることへ貢献するだろう。それは、ロゴセラピーの日本における実践分野を探求し、その機能の仕方を開発することが重要であるとき、これらのことを為すためのネットワークにおいて重要な位置を占めるだろう。

安井　猛 教授（博士）

日本ロゴセラピー＆実存分析研究所・仙台　　Internet　www.logotherapie-japan.net

e-mail　info@logotherapie-japan.net